

氏名・(本籍地)	齋藤 ユリ (東京都)
学位の種類	博士(人間学)
学位記の番号	甲第52号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	小集団における心理的援助技法としての造形表現活動 —不登校・重複聴覚障害者に対するアプローチ—
論文審査委員	主査 村瀬 嘉代子 副査 滝川 一 廣 副査 日笠 摩 子

齋藤 ユリ氏 学位請求論文審査報告書

「小集団における心理的援助技法としての造形表現活動 —不登校・重複聴覚障害者に対するアプローチ—」

論文の内容の要旨

本研究は、不登校生徒・重複聴覚障害者に対する心理的援助として、小集団における造形表現活動の実践を行い、そこでの活動の特質と治療的な意味や配慮点を探ったものである。論文の構成として、第1部では、先行研究の検討から、芸術表現活動の意義と、芸術療法について検討した上で、第2部「不登校生に対する心理的援助技法としての造形表現活動」、第3部「重複障害者施設での実践から心理的援助技法としての造形表現活動」では、著者自身の関わってきた実践の報告を行い、それを踏まえて、第4部で小集団における造形表現活動の特質と活用法を整理している。

第1部では、造形表現活動や芸術療法を歴史的に展望した上で、先行研究を整理して、芸術療法の意義として、①表現すること自体の治療的意義、②表現を通して治療者と交流することの意義、③表現活動や作品自体の集団内での作用をあげている。そして、そのような治癒を支えるものとして、治療者が保護的に見守る雰囲気やそこに生まれる交流が重要であることを指摘している。

第2部では、不登校生徒を対象とする区立中学校通級指導学級において、著者が行った3年間の美術授業の実践を、事例や、長期にわたる共同制作に関する調査、さらに生徒への面接調査を元に検討した。その結果、①言語表現が苦手な生徒にとって自己表出の契機となる、②自分の表現が他者に受け入れられることにより安心感を得る、③作品制作において、試行錯誤や楽しさを味わい、達成感を得られる、④他者をモデルにできる、⑤感情や内的世界をイメージを通して表現して発散できる、⑥制作や作品を通して他者との交流ができる、⑦作品表現や集団制作によって、自分を客観視できる等の効果が得られている。

また、そのような生徒の成長をもたらした要因として、その場が「ありのままの自分で安心して居られる場」であること、教師が生徒の新しい一面に気づき、共に成長することが重要であることを考察している。

第3部では、大正大学カウンセリング研究所で村瀬嘉代子を中心として1999年より行われている聴覚

障害者・重複聴覚障害者施設での心理的援助の一貫としての造形表現活動の実践，その中でも著者自身の関わりを，グループの経過と個人事例から報告し，活動の特質や活用法について検討を行っている。その結果，①準備された素材や課題が，それまで表現の術を持たなかった人にとって，自分なりの表現を見つめる契機となる，②手話でのコミュニケーションすら不自由な重篤な人にとって，コミュニケーションツールとなる，③作品制作を通して達成感を得る，④制作経験を積むことで作品の構成力が高まる，などの効果が確認された。そして，そのような効果をもたらした要因としては，発達や身体状況を考慮した素材や制作環境について準備がなされたことや，体験の積み重ね，集団で行うことによる模倣行動の発現などが挙げられた。

このような活動の中で，参加者がより主体的に参加するという変化も観察されたが，著者はそれをこのような活動効果のみを単独に評価するのではなく，施設での生活におさまり，広げていくためには，より生活に密着した援助が必要でもあり，施設全体の中でのグループ活動の位置づけが重要であることを考察している。

第4部では，第2部・第3部の研究を踏まえて，造形表現活動の特質として，①自己表出の契機となる，②コミュニケーションツールとして有効である，③達成感を得る，④他者をモデルとしうる，⑤自己の客観視と理解，⑥アセスメントツールともなる，⑦他職種との連携の際の資料となる，等の効果を再確認している。また，小集団での造形表現活動を心理的援助として活用するためには，①ありのままの自分である安心の場であること，②援助者とのやりとり，③相互交流，④参加者がともに成長の場を作り出すことが大切であると指摘している。

援助者としては，①一人一人を尊重すること，②参加者のニーズに応じた関わりの工夫，③安心できる場を作ること，④関係者へのフィードバック，⑤援助者同士のコラボレーション，⑥自己一致，⑦自己客観視，が大切であることを確認している。これらは，ひろく臨床心理的援助に通底する態度でもであると結論している。

審査結果の要旨

本論文の意義を捉えるには絵画療法の歴史的系譜をたどって見る必要がある。絵画療法は，最初，精神障害者の特異な描画への注目から，患者の描画表現のうちにその内面世界や精神病理を読みとろうという病理学的な関心から始まり，この流れは描画によってアセスメントをする描画テストへと臨床技法化されていった。他方，リハビリテーションの手だてとして手工芸に目が向けられ，患者が楽しみとして絵を描く活動としての描画となっていった。これは作業療法やレクリエーション療法の流れとなり第二の系譜となっている。第三の系譜として，描画が持つコミュニケーションな治療性に着目して，治療面接の場のなかに非言語的コミュニケーションとして描画を取り入る方法が生まれた。狭義の絵画療法といえばこれになる。

本論文は，第一部では不登校生徒のグループ，第二部では重い重複聴覚障害者のグループでの描画活動をテーマとしている。不登校をはじめ児童思春期を対象とした絵画療法の研究は少なくない。ただ，その多くは狭義の絵画療法の系譜での研究で，心理面接やカウンセリングの場の中での描画からその治療的展開を辿るものである。本論文はそれとはちがいで，通級学級のグループ活動としてめいめいで描いたり皆で共同制作をする集団場面での描画を扱っている。その意味では第二の系譜に近いのだが，特徴はそれを通じての個々の子どもたちの変化をたどり，またそこに関わる著者との相互性のなかで描画と子どもとを捉

えようと試みられており、その点では第三の系譜、狭義の絵画療法的な関与ともなっている。

この関与が大きな意義をもつのは、狭義の絵画療法は「心理治療」という意味が前景化するのに対して、ここではみんなで絵を楽しむという自然な楽しみのなかに治療的支援が浮き上がらずに込められた関わりである点である。こうした関わりが思春期の人々に果たす役割は大きい。ここに本論文の重要さが認められる。問題点を挙げるとすれば、グループ活動としての描画の場に著者も治療的な関係をもって関与しているわけだが、その著者側の関与、関係のあり方の記述にやや不十分さが感じられる。

一般に狭義の絵画療法の多くは個人心理療法の場面で、治療者とクライアントとの一対一の関係の場なかで描画されるため、描画自体はクライアントが単独で描いていても、治療者との関係において描かれた絵、共同作品という性格を帯びる（だからこそ治療性を持ちうる）。本論文の描画も実はそのようなもので（それにグループのメンバー同士の相互性が加味されるが）、そこのところの意識化と記述がもう少し明確に記述されていたらと惜まれる。

第二部の重複聴覚障害者施設でのグループ描画も、基本的には第一部の不登校通級学級のグループ描画と変わらない。しかし、重度のハンディキャップを抱え、人間としての尊厳を脅かされずに生きることも困難な状況を強いられがちな人々に対するこの試みの意義は臨床的に極めて大きく、かつ先駆的・開拓的なものとして高く評価できる。このような聴覚障害に自閉症など複数の重い障害を合併してコミュニケーションに深い困難と偏りを強いられている人々を対象とした活動は多大な配慮と工夫が求められたはずである。その配慮や工夫も含めて貴重な実践研究であるが、ここでも先に述べた弱点、描画の場における著者側の関わりについての意識化とその記述が十分とは考えがたい。踏み込んでそこを明確に論述されていたらと惜まれる。

惜まれる点もあるとはいえ、現在までの絵画療法の3つの系譜にさらに新たな流れを加える端緒ともなる独創性ある優れた論文と評価できる。